

豊明希望チャペル礼拝

2026/7/19

「あなたの罪は赦されています」

ルカの福音書 7：36～50

ルカは、イエス様がたびたび、パリサイ人の家に招かれて食事をしたことを記しています。3回ほど記しています(ルカ 7：36～ ルカ 11：37～「食事の前のきよめの洗いをされなかった」 ルカ 14：1～(水腫の人の癒やし)安息日の癒やし)。

そして、そのたびに、パリサイ人との考え方の違いが、明瞭にされています。

11 章では、イエス様が、食事の前にきよめの洗いをなさらなくて、清められる



べきは、外側ではなくて心の内側である事を教えるエピソードで、

14 章では、水腫といって、体の一部に水がたまる症状(大谷選手?)が癒される場面で、安息日の癒やしであったので、パリサイ

人との間で、神に従う優先順位のようなものが試された場面です。

今回の、いわゆる罪深い女の癒やしにおいて、単に癒されたと言

うことでなく、パリサイ人との考え方、ものの見方の違いが強調

されている場面です。ルカは、比較的長く、この場面を記録しな

がら、イエス様の考え方、あるいは見方と、パリサイ人の見方を対比して、イエス様は、罪人を、いや、私たちを、どう見ているのか、どういう基準で見ておられるのかを明確に示す内容となっております。内容的に、いわゆるマグダラのマリヤの香油そそぎ、正確にはベタニアの女の香油注ぎと、同じ出来事になっていますが、ベタニアの女の香油の話は、イエス様の十字架の前の葬りの備えのような内容で、そんな時期になされた香油注ぎとなっていますが、ここでは、ルカが描く一連の、パリサイ人の家で起きた出来事の一つとなっていて、先ほど言いましたように、パリサイ人の価値観とイエス様の価値観を対比する点に視点が当てられた内容となっています。

前回に続いて長い箇所ですので、早速聖書を読んでいきます・・さて、ことの起こりはこうでした。

「7:36 さて、あるパリサイ人が一緒に食事をしたいとイエスを招いたので、イエスはそのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。7:37 すると見よ。その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持って来た。7:38 そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った。」



この足に香油をぬる行為は、当時の文化では、どれほど一般的であったかはわかりませんが、いずれにしても最高レベルの敬意と愛情、献身を示す行為でありました。

ここで、ルカの福音書の他のパリサイ人との会食の例と同じように、聖書理解、律法解釈の理解の違いが、ルカによって強調された記事となっています。

この時、パリサイ人はこう思いました。

「7:39 イエスを招いたパリサイ人はこれを見て、「この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いからだ」と心の中で思っていた。」

暗に、こんな女に、香油を注がれて敬意を表されたとしても、価値がない、どれほどのことか？と言っているようです。もちろん、心の中で思っただけで声には出しませんでした。イエス様は、人の心の中を知る事の出来るお方です。イエス様は、こう言われ、一つの例をあげて、パリサイ人の考え方をご自身の考え方がどのように違うかを示され、問われました。

「7:40 するとイエスは彼に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生、お話しください」と言った。7:41 「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリ。7:42 彼らは返すことができなかったのも、金貸しは二人とも借金を帳消しにしてやった。それでは、二人のうちのどちらが、金貸しをより多く愛するようになるでしょうか。」7:43 シモンが「より多くを帳消しにもらったほうだと思います」と答えると、イエスは「あなたの判断は正しい」と言われた。」

このイエス様のお話は、正確に読むと、少し違和感のある例話です。

金貸しが、50 と 500(デナリ)を貸して、その借金を帳消しにしてやった場合、どちらが、よりありがたく、感謝な事となるかと問われたのです。ここには、39 節にあるパリサイ人が、この女は罪深い女だと言ったことと関係があります。借金の額は、この罪深さの度合いだと思われます。パリサイ人に言わせれば、この女の借金は 500 だと言うわけです。

イエス様のこの例話からすると、その罪深さの判断に異論はないようです。いや、罪深いのは、神を素直に信じないパリサイ人のほうだ、あなたのほうだとはあえて言われません。もし比較するなら、パリサイ人あなたの罪は 50 の借金、この罪深い女の借金は、その 10 倍、500 だと言うことで、パリサイ人の言う、もし預言者なら、この女がどんなに罪深いかを知っているはずだと言った、その価値観に違いはありません。あなたの言うとおり、この女は、あなたの罪より、10 倍罪深い、その点に異論はないと言っているように思えます。

ただ、違和感があると言ったのは、すでに、その借金が赦されているという前提で語られているという点です。すこし、あまのじゃくというか、細かいかも知れませんが、この女は、まだ赦されていません。この後、赦すと出てくるのです。いや、それも正確ではありません。このあと出てくるのも、**「7:48 そして彼女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。」**すでに赦されているというものです。

時系列が変ですという話しです。すくなくとも、ここ 48 節で、赦されているというイエス様の声を聞く前に、この女が赦されていると感じているはずがないのです。むしろ、イエス様の足に香油を注いだとき、私は罪人ですという告白があり、

赦して欲しいという願い、あるいは、赦していただければ、この罪の重さに耐えられないのですという、生きてはいけないのですという、訴えであり、叫びであります。

しかし、イエス様は、彼女が入ってきたときから、赦されているなら、この女のように感謝すると言われ、また、女に直接語りかけられた時にも、赦されていると、すでに赦されていると言われているということです。

もっと直裁に言えば、彼女は、借金が赦されたから、そして、その借金が莫大であって、それが、赦されたと知ったから、彼女は、感謝して、高価な香油をイエス様の足に注いだわけではなく、いまだ赦されたと思っていないし、思っていないからこそ、不相応と思われるほどの高価な香油を惜しげなく注いだのです。

このイエス様の、すでに赦されたから注いでいるという御言葉と、いまだ赦されていないからこそ、罪の告白として、あるいは、罪の呵責(かしやく)からの叫びとの間の違和感です。

おそらく、ルカの福音書で、わざわざ、ベタニアの女の例とは別に、似たようなこの話をあえて記録するのは、その点にあるように思います。

結論的な言い方をします。私たちが、自分の罪に耐えられず、訴えられる方はイエス様だと知って、訴えたときに、叫び声を上げたときには、すでにイエス様は、私たちの罪を赦しておられるのであり、イエス様の赦しとはそういう事だということです。



私たちの悔い改めと告白が先ではなく、イエス様が私達を見ておられ、すでに私たちを受け入れ、赦しておられる、すくなくとも、赦しをすでに用意して下さるという事、イエス様の愛と赦しが常に先だということです。

少し脱線するかも知れませんが、NHKのドラマで、こんなドラマがありました。「マグダラ屋のマリア」(小説『マグダラ屋のマリア』: 原田マハ)です。過去の罪を抱え、その罪滅びしのために、宿屋の女将(おかみ)への奉仕のために、寒



風吹きすさぶ北の地の1軒の食堂で、いわば、罪の贖いのために生きる女性マリア。そこに、やはり、友人を死に追いやってしまった、その罪の重荷のために、自殺を決意して、その北の地に来るが、死にきれず、その食堂の前で、凍え死にそうになっているところを、助けられて、



その食堂で働く一人の青年。その人たちが、次第に赦され、再生していく物語です。

「うひゃー、なんとまあ、どれくらいテーマに取り組んだものだなー!」と、中島みゆきが、驚き、感動して、このドラマのためにと、曲を書いた、この小説の紹介文に

はこうあります。

「原田マハの小説『まぐだら屋のマリア』を原作とした本作は、罪を背負い命の火が消えかけた人々が、自らの過去と向き合いながら再生していく姿を描く感動作となっている。物語の舞台は、“尽果”（つきはて）と呼ばれる空と海、雪に閉ざされた架空の町。そこには命の灯が消えかけた者たちが、なぜか辿り着くと言われている。主人公・紫紋は、自らを追い詰め自死を覚悟して尽果へと流れ着くが、「まぐだら屋」で働く女性・りあ（通称マリア）と彼女の作る温かな料理を通して、次第に「**無償の愛**」に触れ、生き直す勇気を取り戻していく。」と。

「無償の愛」は、まさにどえらいテーマです。それは、確かに聖書にしかないテーマであり、本当の意味で、イエス様の十字架の贖いにしか明確には見る事が出来ない神の愛の姿です。

今日のこの箇所は、マグダラのマリヤとは違いますが、マグダラのマリアの出来事の、ルカによる神学的な解説になっているような出来事です。

マグダラのマリヤのあの韻書的な出来事、そして、このパリサイ人の家での、罪深いと言われる女がイエス様によって罪赦される場面、そこで、本当の意味で何が起きているのか、それは、ある意味、無償の愛であり、神の愛であるということでもあります。

そして、その神の愛とは、私たちが、悔い改めるより先に、先に、私たちが、必ず、イエス様のところに来ると、確信され、また、すでに赦しを用意し、待っていて下さるという愛であり、罪を悔い、立ち上がれないでイエス様の御前にひれ伏したときには、すでに、私はあなたの苦しみを知っている、すでに受け入れ、愛し、赦していると言われ、また宣言される愛であるということです。

ルカが記した 48 節を含む、残りの節を読みます。

「7:44 それから彼女の方を向き、シモンに言われた。「この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。7:45 あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。7:46 あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。7:47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」7:48 そして彼女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。7:49 すると、ともに食卓に着いていた人たちは、自分たちの間で言い始めた。「罪を赦すことさえするこの人は、いったいだれなのか。」7:50 イエスは彼女に言われた。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」」

感動的な場面ですが、最後の節をいま一度読みます。

「7:50 イエスは彼女に言われた。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」」

イエス様に直接会っていないくても、見ていないくても、（どこでイエス様を知った

のかわからないが・・・)イエス様こそ救い主、私を受け入れて下さると信じて、罪を告白しようと思ったとき、委ねようと決意したとき、すでに、赦されている。

それは、多くのイエス様に直接であったことのない異邦人達、私たちへのメッセージでもあります。信仰によって救われる。私を信じるなら、私、イエスはそこにいる、いて、赦しを与えると言う宣言であります。

この週、見えないけれど、私を心の底まで、見ておられるイエス様を思い、罪であればそれを委ね、献身であればそれを献げ、感謝であれば、それもイエス様にこそ献げ、感謝と賛美の歩みをここからはじめさせていただきます。